〈書評〉

RENNYO : The Second Founder of Shin Buddhism— With a Translation of his letters, by Minor L. Rogers and Ann T. Rogers, Asian Humanities Press, Berkeley, California, 1991.

山折哲雄

「蓮如」という、日本人のあいだでもあまり知られていない宗教的人間にかんする本格的な研究が、英語で書かれ、アメリカで出版された。それは、英語で書かれたほとんどはじめての試みだったのではないだろうか。

著者はマイナー・L・ロジャーズとアン・T・ロジャーズの夫妻。マイナー氏の方は米国ワシントン・アンド・リー大学の宗教学部の教授。夫人のアン氏も同じ大学で日本語を教えている助教授である。夫妻の共同事業であったということができるが、マイナー氏は残念なことに本書の刊行を目前にして一九九一年八月に急逝した。

マイナー・ロジャーズ教授は、ハーバード大学で日本の文化と歴史を学び、その過程で蓮如という人物と出会った。以後二十年にわたって夫妻の共同による蓮如研究がはじまり、こんどの刊行へとその成果が実った。ちなみにロジャーズ教授は一九七二年に、日本仏教の研究でハーバード大学から学位をえている。

さて、本書の主人公の蓮如という人物は、日本仏教を代表する大教団・浄土真宗における第八代の法主の名である。この教団を開いた始祖が親鸞であったことは、いまさらいうまでもない。十三世紀に活躍した親鸞は、鎌倉時代の新仏教運動をみちびいた輝ける旗手として高い評価をうけてきた。その後この宗教教団は衰微の一途をたどったが、十五世紀の蓮如のエネルギッシュな活躍によって大教団へと発展した。この時代は応仁の乱という、日本人の生活様式や価値観が激変する動乱の時代であったが、そのシュトルム・ウント・ドランクの時代に、蓮如は大胆な伝道活動にのりだし信徒

の大規模な組織化に成功したのである。今日における本願寺教団の基礎は、そのときに定まったといってよい。この蓮如がもしも存在しなかったとしたら、今日の本願寺教団は存在しなかったであろうし、また親鸞が主張した浄土往生の救済論が一般の大衆のあいだにひろがることもなかったにちがいない。

ところがまことに皮肉なことに、これまでの日本における蓮如の研究は、親鸞のそれにくらべてきわめて微々たるものであった。かれの人物や宗教体験も、親鸞にくらべて低い評価しか与えられてこなかった。したがってまた、そのような蓮如という存在をひろく日本の歴史や文化のなかに位置づけようとする試みも、ほとんどなかったといってよい。蓮如研究は親鸞研究にくらべて質的にも量的にもみるべき成果があげられてはいなかったのである。

そのような現状を顧るとき、こんどのロジャーズ夫妻による蓮如研究が、従来のさまざまな限界の枠をふみこえて一歩さきに進みでようとしている点は大変貴重であると思う。それが可能となったのは、おそらく夫妻がハーバード大学での研鑽もさることながら、来日して龍谷大学でその研究を続行し、多くのすぐれた専門家たちとの学問上の交流をつみ重ねたからであったにちがいない。

本書は三部からなる。

第一部は、蓮如の生涯と思想を扱った章である。本願寺教団における伝統教学の立場にもとづく研究、現代の歴史学や思想史の立場からする実証的な研究、それに比較宗教学的な観点からの研究などをひろく参照して、蓮如の人間像と社会活動の全容を浮き彫りにしている。参照文献は詳細をきわめ、たがいに対立する意見をとりあげてバランスのとれた推論を展開している。蓮如の伝記としてもよくまとまった構成になっているといえるだろう。

第二部は、蓮如の「御文」の翻訳からなっている。「御文」とはまた「御文章」ともいい、蓮如が伝道、布教のために、一門一家や信徒にあてて書いた書簡を集めたものである。この「御文」の翻訳の仕事は、もっぱら夫人のアン・ロジャーズ助教授があたった。その「御文」のなかで蓮如は、親鸞に発する浄土真宗の救済論をわかりやすい言葉で解き明かし、当時各地で唱えられていたさまざまな異端的な見解を正そうとしている。蓮如の思想と信仰を知るうえで、最重要の文献であるといってよい。

さきにのべたように、本願寺は蓮如の代になって飛躍的な発展をとげたのであるが、本願寺が大きな組織になるにつれて信徒たちの信仰と生き方の指針となるような基本的なテキストの作成が望まれるようになった。本願寺教団の「バイブル」もしくは「公教要理」といったものが要請されることになったのである。そこで蓮如の孫にあたる円如の代になって、数ある蓮如の「御文」のなかから代表的な八十通を選びだして編集し、それを「御文」の基本テキストとする教学上の方針が打ちだされた。この基本テキストは五章で編成されているところから「五帖御文」と呼ばれ、また「帖内御文」といわれてきた。第一帖から第四帖までは年月日順に配列され、最後の第五帖

に年月未詳のものがまとめて収録され、その総数が八十通に達する。しかしながらじつをいうと、このほかにそこからもれた御文がかなりの数にのぼっているのであるが、それらの御文は本書では翻訳されていない。いわば本願寺によって公的に認められた御文の基本テキストである「帖内御文」だけを採用して、そこからもれた「帖外御文」は翻訳の対象から外されているわけである。そして問題はそれにとどまらない。これらの「帖外御文」はきわめて重要な第一次資料であるにもかかわらず、翻訳の対象から外されることによって本書の蓮如研究の視野からも排除される結果になっている。換言すれば、本願寺によって公認された資料のみにもとづいて蓮如像を刻みあげるという研究方針を、それは暗に示すことになっているのである。

この問題についてさらにつけ加えるならば、右にのべた公認の「帖内御文」と非公認の「帖外御文」のあいだにはいくつもの矛盾する意見が見出されることに注意しなければならない。蓮如の人生観をはじめとして救済論や儀礼の問題についてかならずしも共通しない考え方や不協和音が目につく。そのうえそのような蓮如の思想における不整合な部分をたんに矛盾ととらえるのか、それとも蓮如における多元的な人間の幅ととらえるかはかなり微妙な論点であり、蓮如の根本的評価にかかわる重要な分岐点であると私は思う。その蓮如研究にとって欠かすことのできない第一次資料（すなわち帖外御文）が本書では積極的に用いられていないのである。

それはいったいどうしてなのであろうか。蓮如の御文の基本資料としてはすでに一九三七年に、稲葉昌丸氏の編集による『蓮如上人遺文』が出版されている。この遺文集では帖内・帖外の枠組をとりはらい、現存する蓮如の御文を年代順に配列する方法で編集がおこなわれていて、蓮如の精神的な成長と行動の跡を歴史的に追跡できるような編成になっている。それは蓮如にかんする根本資料を展望するうえで貴重な研究史の一頁を飾る仕事であったといわなければならない。しかし本書の著者たちは、その稲葉氏の研究の成果を巻末のビブリオグラフィーの中では言及しつつも、なぜか重要視していない。批判的に再構成された稲葉氏のテキストには拠らずに、本願寺公認の「帖内御文」にもっぱら依拠してその研究がすすめられているのである。率直にいって私はそこに、本書における蓮如研究の決定的な「偏向（バイアス）」の跡を見出すのである。

このような本書の研究方針は、蓮如研究にとってはもう一つの重要な資料である「遺言四十一ヶ条」を視野の外におく態度にもつながっている。死に臨んで蓮如が子どもたちにいい残したこの遺言状には、社会や人間にかんする蓮如の多面的な関心が生き生きと再現されているが、そこに含まれているかれの人生観や思想は、右にのべた本願寺非公認の「帖外御文」の内容と対応するところがすくなくないことに注意しなければならない。「帖外御文」と「遺言状」は、蓮如という人物のもう一つの重要な側面を大映しにする記録として、蓮如研究には不可欠の第一次資料であると考えられるのであるが、その問題の検討が本書で

は慎重に(!)回避されているわけである。

最後に、本書の第三部は蓮如による後世への遺産を論ずる四つの章から成り立っている。すなわち一—聖典—蓮如の御文、二—報恩—真宗の信心、三—西本願寺—国家鎮護の担い手、四—現代への遺産、の四論文がそれである。さきにのべたように教団としての本願寺は蓮如の代になって飛躍的に発展した。その巨大な遺産が今日までの本願寺の存在を大きく方向づけてきた。蓮如の遺産なくして今日の本願寺教団はありえなかったわけであるが、その遺産の全容を負の面をも含めて批判的に考察しようとしているのがこの章である。したがってこの部分においては、始祖・親鸞と中興の祖としての蓮如とのあいだの思想・信仰上の異同のテーマが集中的にとりあげられ、本願寺教団が近世から近代にかけて辿った歴史的展開の特徴が吟味されることになる。いわば思想的原点としての親鸞と、大教団の組織者としての蓮如、という視点がその議論の背後に設定されている。

これらの章はいまのべたように蓮如の後世に対する「遺産」を考察する部分であるが、そのことを通して蓮如を歴史的に位置づけ、その宗教家としての人物に評価を加えようとするところに眼目がある。親鸞の生き方にたいして蓮如の生き方を対比し、その功罪を検討しようとしている。その場合著者は、比較宗教史家のカントウェル・スミスの言葉、すなわち「重要なのは、それが歴史的にどのように生みだされたかということではなく、それよりも、そこから歴史的に何が帰結したかということを問うことだ」という言葉に注意を喚起している。もっともな方法といっていいだろう。そのことを問うことによって、親鸞（十三世紀）と蓮如（十五世紀）の歴史的位相の相違が明らかにされ、かれらの信仰の特質についての異同が示されることになるからである。

このようにして著者が力を注いで論じている重要な問題の一つが、阿弥陀信仰のそれである。親鸞のいう「信心」と蓮如が好んで用いる「安心」はいったい同一か異質かという論題である。「信心」も「安心」も、阿弥陀如来による他力の救済に全身をまかせるということであるが、しかしその両者のあいだには用語上も内容上も微妙なニュアンスの相違がみとめられる。著者たちは資料としての「御文」をとりあげ、それを中心に安心と信心の用法、用例を比較して綿密な検討を重ねているが、結局は、親鸞のいう信心も蓮如のいう安心も本質的に変りのないものであったという結論を導きだしているのである。

しかしながらはたしてそうであろうか。もっとも、著者たちが依拠する「帖内御文」という資料の範囲内においてはそういうことがいえるのかもしれない。だが、さきにのべた「帖外御文」などの世界を見渡した場合でも、そういうことがいえるのであろうか。そして事柄はむろん「信心」と「安心」をめぐっての問題にかぎらない。一歩ゆずって「帖内御文」にかぎってみても、蓮如の前半生における救済論と吉崎体験以後の救済論のあいだには看過しえない重要な差異を見出すことができるからである。たとえば、その前半生におけるかれの

「信心」（もしくは「安心」）のカテキズムは、「タノム一念ノオコルトキ、如来ハタスケタマウ」という文脈のなかで語られていた。大事なのは「タノム」という帰依信順のひたむきさであり、そのあとに救済がくるという確信であった。帰依の一念（信心）が先行して、そのあとに救済が約束されるという、帰依→救済の緊張感が保たれていたといってよい。ところがそれにたいして、吉崎体験以後の彼の御文には、「タスケタマヘトタノム」というセットフレーズが頻出するようになる。「助けてくれ」という悲鳴に近い希求感情が全面に押しだされているといってよいだろう。それは、前半生における「タノム一念ノオコルトキ……」という帰依信順の敬虔感情とは質的に異なる「信心」の位相を示しているように私にはみえるのである。「信心」の解釈にかんしてそのような変化が生じた背景には、むろん吉崎における政治状勢の激変という要因が介在していたはずで、それにたいする教団側の存亡をかけた対応ということがあった。政治権力側からの圧迫を「王法」とうけとめ、それとの妥協をはからなければならなかった蓮如の苦心の転身という事態がそれにつづいておこる。かれの「信心」論の転換は、このような「王法」にたいして「信心」をどのように位置づけるかという問題ともつながっていたはずである。しかしこれらの諸問題が本書にはそれとして追及されてはいないのである。

もっとも著者は、右にのべた信心—安心論におけるように、親鸞と蓮如のあいだの同質性や類縁性のみを強調して論を立てているのではない。むしろその両者を、対立的な構図のなかに配置することに意を用いているといってもよい。たとえば、親鸞の信仰は個人中心に方向づけられた性格のものであるのにたいして、蓮如のそれは集団中心に方向づけられた性格のものだったという考え方に、それがあらわれている。それは国家や権力にたいする両者のかかわり方、出所進退のなかに示されているともいう。このような考え方が、著者のハーバード大学時代の師であったロバート・ベラー教授の考え方にもとづくものであることはいうまでもない。

そして、それだけではない。このようなベラー＝ロジャーズ流の親鸞—蓮如解釈の方法は、程度の差こそあれそのままわが国の思想史家や歴史家たちの立場と通い合っている。すなわちわが国の戦後における親鸞研究に近代主義的な観点を設定した家永三郎氏や笠原一男氏、そして二葉憲香氏や信楽峻麿氏などの研究手法がそれである。同氏たちの議論をつらぬく共通の問題意識こそ、一方の極に純粋の信仰の灯をともしつづけた親鸞、国家の権威と世俗の価値に抵抗した「信心為本」の親鸞をおき、それにたいして他方の極に、教団の護持と発展のために権力との妥協をあえて辞さなかった蓮如、「信心為本」の原理とともに「王法為本」の奥の手をちらつかせた蓮如、を対置するという二項対立の枠組のなかで、両者の信仰と思想を比較するというものであった。親鸞の「個人主義（インディヴィジュアリズム）」と蓮如の「共同主義（コレクティヴィズム）」の対立といってもよい。阿弥陀如来の救済力を直視した親鸞と、その救済力を「恩」という世俗的価値のなかに包

摂、拡充した蓮如との対比という図式が、かれらの議論の背後に横たわっていたことも指摘しておいてよいだろう。

このような考えに立つとき、蓮如以後の本願寺教団の命運が、必然的に世俗の価値（俗諦）と出世間の価値（真諦）というたがいに矛盾する信念体系を内部にはらむようになるということが明らかにされる。その結果、本願寺は国家権力との癒着の歴史を現代まで引きずることになったとする結論がみちびきだされるわけである。教団内部の論題である「真俗二諦」論がこうして浮上し、その錯誤にみちた道行きのいわばイデオロギー的出発点を画する人物が蓮如であり、その真俗二諦論の虚偽性をのりこえる永遠の原点が親鸞その人であるとする考え方が、そこに成立することになったといってよい。

蓮如はここでは、親鸞のたんなる世俗化されたコピーであるにすぎない。親鸞という確かな原像を映しだす仮の虚像であるにすぎない。その点において本書の著者ロジャーズ夫妻もまた、前期の家永・二葉・信楽の諸氏の場合におけるのと同様に、その根本の認識において蓮如を親鸞のエピゴーネンととらえている。そのバイアスのかかった蓮如像が、本願寺教団公認の「御文」のみを第一次資料とする研究態度と結びつき、同時に、とりわけさきの二葉・信楽両氏の近代教学的視点にもとづいて再構成されたものであることも見逃すことができない。そのうえさらにつけ加えるならば、本書の思考上のレファレンスがことごとく「西本願寺」系のそれに依拠していることも気にかかるところである。蓮如の「御文」文献を分析するうえで、東本願寺に属した稲葉昌丸編の『蓮如上人遺文』を積極的に用いなかったことも、あるいはそのこととと関係しているかもしれない。本書の第三部では、鎮護国家の担い手としての本願寺の遺産が問題にされているが、その場合でも「西本願寺」の事例に限定して議論が展開されているのであって、その点もバランスを失った論述の態度といわなければならないだろう。

以上私は、本書にたいしていささかきびしすぎる評言を加えたかもしれない。むろん私とても、本書が蓮如の全体像を英語圏を主とする西欧の知的世界にむけてはじめて紹介する労作であることを、つゆ疑うものではない。おそらくそれだからこそ、本書は今後においてすくなからざる影響を内外に与えることになるだろうと考えて、いくつかの疑問点を率直に指摘してみたのである。

本書はその末尾において、蓮如による現代への遺産というテーマをとりあげている。そのなかで著者は、日本の現代作家・井伏鱒二の小説『黒い雨』のなかにでてくる一エピソードをとりあげて、蓮如の御文の今日的意味についてふれている。井伏の『黒い雨』は、一九四五年、広島におとされた原爆によって悲惨な苦しみにさいなまれる庶民の悲劇を淡々と描いた作品である。そのなかで、ある工場に勤める中年の男が、つぎつぎと倒れていく死者たちのために略式の葬儀をおこなう場面がでてくる。かれはにわか坊主になって、臨時に教えられたままに阿弥陀経を唱え、蓮如の「白骨の御

文」を読みあげるのであるが、そのような素人の手になる葬儀をくり返しているうちに、しだいに「白骨の御文」の世界に惹きつけられていく。そこにつらねられている哀調を帯びた文章が、人生の悲しみをそのままに浮きあがらせ、心にしみ入るような無常感をたたえていることに心を動かされていくのである。

その『黒い雨』のなかにでてくる印象深い場面を引用し紹介して、本書の著者は、蓮如によって生みだされた宗教世界が日本文化の根幹を流れる「無常」の意識と微妙にふれ合っていることを指摘している。その点に、蓮如による現代への遺産の重要な側面があることに注意を喚起しているのである。私はこのような視点のなかから、蓮如という人間にたいする新しい認識の芽がふきだしてくるのではないかと思う。従来のなかば定型化してしまった観のある、親鸞か蓮如か、という近代主義的な二元論の狭い隘路をくぐりぬけて、より広い展望のなかで蓮如という現象を見直すことができるようになるだろうと思うのである。